

## 第 2 章

この章では、付き添い者が世話をしていた入院児の状況(年齢、既往症、入院時期、入院期間)、病院までのアクセス、付き添いが始まったときの状況、付き添いの選択の有無などについて調査した内容を報告する。

### 【入院児の状況】

入院児の年齢は「1歳未満」と「1～2歳未満」が全体の約半数を占め、乳児期の子どもが多かった。また、入院児の病気で最も多かったのは「心臓の病気」だった。年齢3区分別(乳児/1歳未満、幼児/1～6歳未満、児童/6歳以上)でみると、乳児では「心臓病の病気」、幼児では「呼吸器の病気」、児童では「小児がん」が最も多かった。

### 【入院の状況】

入院した時期は、「1年以内(2022年1月以降)」の入院が4割弱と最も多く、「現在入院中」は1割程度だった。また、「コロナ後(2020年1月以降)の入院」が8割を占めた。

入院した期間を「短期(2週間未満)」と「長期(2週間以上)」で分けると、「短期」が4割弱、「長期」が6割で長期入院が多かった。年齢3区分別(乳児/1歳未満、幼児/1～6歳未満、児童/6歳以上)でみると、「児童」では短期入院よりも長期入院のほうが3倍以上多かった。これは「小児がん」の割合が他の年齢区分よりも高かったことが関連していると考えられる。入院していた病院の種別でみると、「大学病院」と「子ども病院」は長期入院の割合が高く、「それ以外の病院」では短期入院の割合が高かった。

回答者が付き添いしていた病院は583カ所で、全国に幅広く分布していた。このうち10人以上の回答があった病院は99カ所だった。583カ所の中には「中核病院小児科」(全119カ所/質の高い小児医療を継続的に提供できる大学病院・子ども病院等)が113カ所、「地域小児科センター」(全397カ所/24時間体制で小児二次医療提供病院)が278カ所、計391カ所が含まれている。

### 【病院までのアクセス】

自宅から病院までの所要時間は「30分～1時間未満」が4割弱と最も多く、次いで「30分未満」と続き、「1時間以内」だった人が全体の7割弱を占めた。また、病院までの交通手段は「自家用車」が最も多く、全体の8割に上った。

### 【付き添い時の状況】

「緊急入院」は全体の6割で、付き添いは突然始まることが多いのがわかった。また、付き添い者の9割は病院に泊まり込んで付き添っていた。

入院期間別にみると、短期入院では「付き添い入院のみ」が8割強と圧倒的に多く、長期入院

になるとその割合が6割ほどに減っている。

年齢3区分別（乳児／1歳未満、幼児／1～6歳未満、児童／6歳以上）でみると、「付き添い入院のみ」の割合が最も高かったのは幼児で8割弱、「面会のみ」の割合が最も高かったのは乳児で1割強、「付き添い入院と面会の両方」の割合が最も高かったのは児童で2割だった。

さらに、入院していた病院の種別でみると「付き添い入院のみ」の割合が最も高かったのは、それ以外の病院で全体の8割を占めた。大学病院は8割弱、子ども病院は4割強だった。子ども病院は、大学病院やそれ以外の病院に比べて「付き添い入院と面会の両方」「面会のみ」の割合が高い。

### 【付き添いの形態の選択について】

付き添いの形態（付き添い入院または面会など）を「選べた」のは2割で、8割弱の付き添い者は選択の余地がなかった。

年齢3区分別（乳児／1歳未満、幼児／1～6歳未満、児童／6歳以上）で付き添いの形態を「選べなかった」割合をみると、乳児が8割強、幼児が8割、児童が6割強と、子どもの年齢が低いほど選択できなかった。

入院していた病院の種別で付き添いの形態を「選べなかった」割合をみると、最も高かったのは、それ以外の病院で全体の8割強を占めた。大学病院は8割、子ども病院は6割弱だった。

入院期間別でみると、短期（2週間未満）は、長期（2週間以上）よりも付き添いの形態を選べなかった。

### 【付き添っていた病室のタイプ】

泊まり込みができる「多床室」と「個室」で付き添っている人がそれぞれ半数以上いた。また、乳児の1～2割は原則泊まり込み不可・面会のみ「NICU（新生児集中治療室）」や「PICU（小児集中治療室）」に入院していた。

付き添い者の9割は病室に泊まっていた。病室以外では自宅、家族の滞在施設、ホテル、ウィークリーマンション、知人・親戚の家などさまざまな場所で泊まっていた。わずかながら車中泊をしている人もいた。

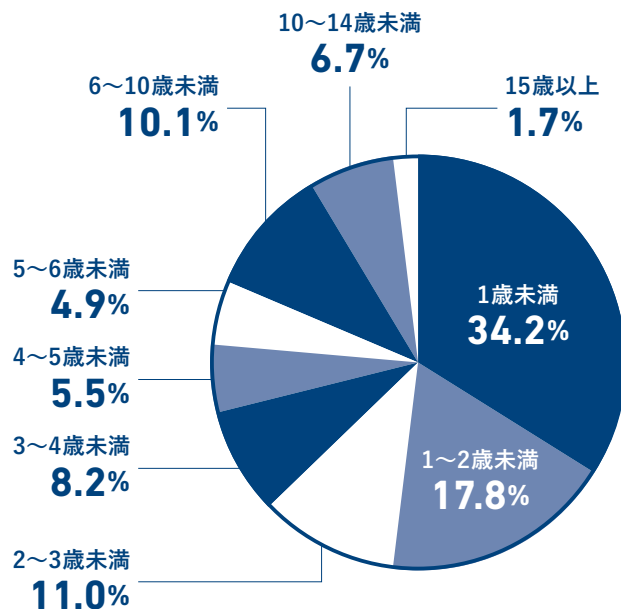
## 5 子どもの入院時の状況

本調査では、対象期間（2018年1月～2022年12月16日）に、0～17歳の子どもの入院に付き添っていた人を対象とした。対象期間に複数回入院した場合は、最も長期間に及んだ入院について回答を得た。

### ■ 入院時の年齢

付き添いした子どもの入院時の年齢（すでに退院している場合を含む）をみると「1歳未満」34.2%（ $n=1,244/3,643$ ）、「1～2歳未満」17.8%（ $n=647/3,643$ ）をあわせて半数以上を占めた。その他の年齢にも大きな偏りなく分布していた。

図表2 子どもの入院時の年齢（ $n=3,643$ ）



## ■ 病気の分類

入院時の病名について、14項目（資料／アンケート調査票 参照）を示し、あてはまるものを把握した（複数回答可）。「その他」25.6%（n=931／3,643）を除き、割合の高かった5項目は、「心臓の病気」18.4%（n=671／3,643）、「呼吸器の病気」15.8%（n=576／3,643）、「小児がん」14.0%（n=509／3,643）、「神経・筋の病気」9.2%（n=334／3,643）、「染色体異常症と遺伝子疾患」9.0%（n=328／3,643）であった。

年齢3区分別に10%以上を占めた病名をみると、乳児（1歳未満）では「心臓の病気」25.6%（n=318／1,244）、「呼吸器の病気」14.8%（n=184／1,244）、幼児（1歳～6歳未満）では「呼吸器の病気」46.5%（n=802／1,725）、「心臓の病気」16.5%（n=285／1,725）、「小児がん」14.5%（n=205／1,725）、児童（6歳以上）では「小児がん」31.2%（n=210／674）、「神経・筋の病気」12.9%（n=87／674）、「血液の病気」10.4%（n=70／674）、「心臓の病気」10.1%（n=68／674）であった。

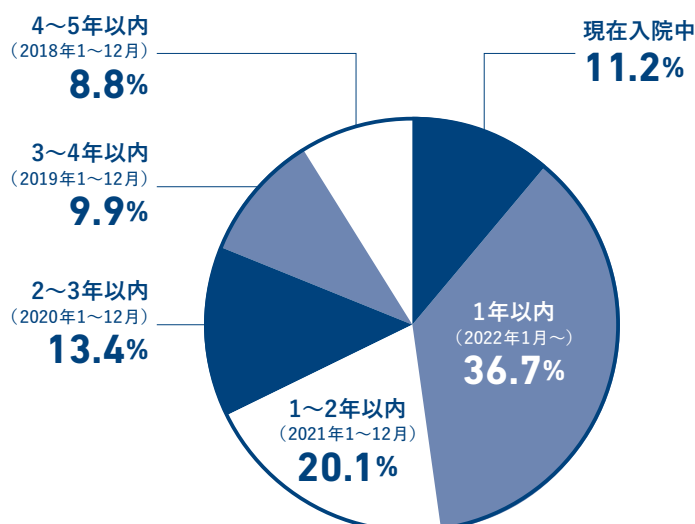
## 6 入院の状況

### ■ 入院した時期

入院の時期をみると、「現在入院中」は11.2%（n=409／3,643）だった。「1年以内」の入院が36.7%（n=1,335／3,643）と最も多く、「1～2年以内」20.1%（n=731／3,643）がこれに次いだ。

入院の時期をコロナ禍前後で区分すると、「コロナ前（2019年12月以前）」18.7%（681人）、「コロナ後（2020年1月以降）」81.3%（2,962人）であった。

図表3 子どもが入院した時期（n=3,643）

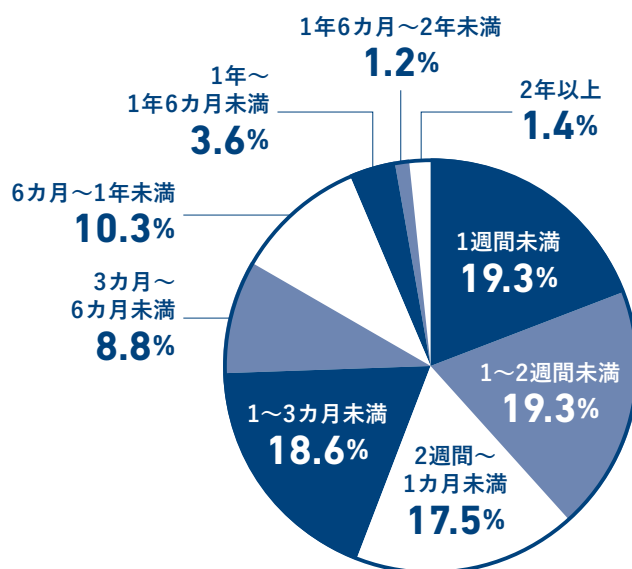


■ 入院期間

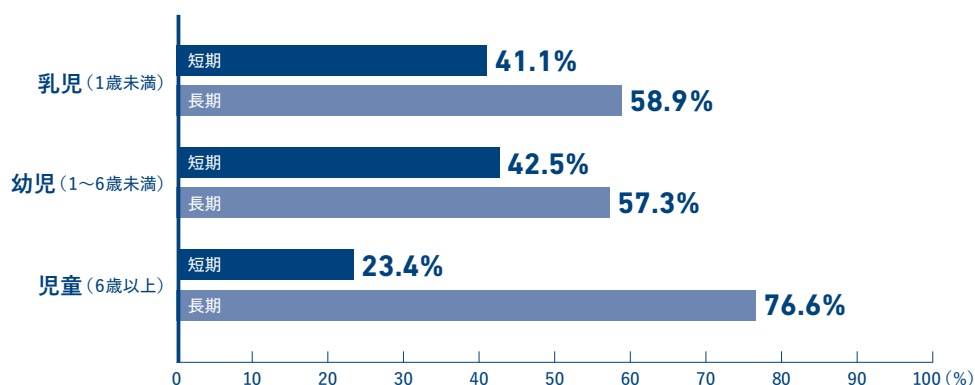
入院の期間をみると「1週間未満」19.3% (n=704/3,643) と「1~2週間未満」19.3% (n=702/3,643) をあわせた短期入院が38.6% (n=1,406/3,643) であった一方、2週間以上の長期入院のうち、半年以上入院との回答が計16.4% (n=598/3,643) を占めた。

年齢3区分別に入院期間の内訳をみると、どの年齢区分も「短期(2週間未満)」より「長期(2週間以上)」の割合が高い。一方で、乳児(1歳未満)、幼児(1~6歳未満)では「短期」と「長期」の割合はほぼ同じだが、児童(6歳以上)では「短期」が23.4% (n=158/674)、「長期」が76.6% (n=516/674) と、長期入院のほうが圧倒的に高かった。児童では「小児がん」の割合が他の年齢区分より高かったことが、入院の長期化に関連していると考えられる。

図表4 子どもの入院期間 (n=3,643)



図表5 年齢3区分でみた入院期間



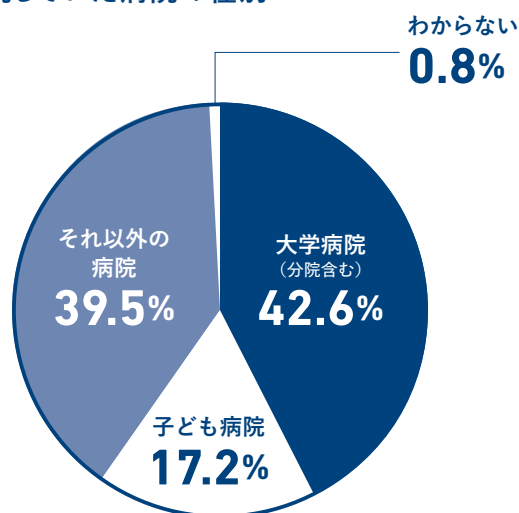
### ■ 入院していた病院の種別

入院先病院の種別をみると、「大学病院（分院を含む）」42.6%（ $n=1,550/3,643$ ）、「子ども病院」17.2%（ $n=628/3,643$ ）、「それ以外の病院」39.5%（ $n=1,437/3,643$ ）という内訳であった。

年齢3区分別にみると、入院先の内訳に大きな違いはみられなかった。

入院期間別にみると、大学病院は「短期（2週間未満）」が29.1%（ $n=409/1,406$ ）、「長期（2週間以上）」が51.0%（ $n=1,141/2,237$ ）と長期入院の割合が高い。同様に子ども病院も「短期（2週間未満）」が11.0%（ $n=155/1,406$ ）、「長期（2週間以上）」が21.1%（ $n=473/2,237$ ）と長期入院の割合が高い。一方、それ以外の病院では「短期（2週間未満）」59.1%（ $n=831/1,406$ ）、「長期（2週間以上）」27.1%（ $n=606/2,237$ ）と、その割合が逆転する。

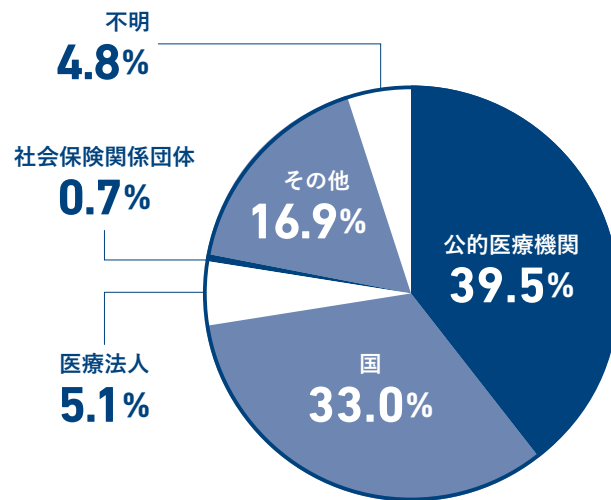
図表6 入院していた病院の種別（ $n=3,643$ ）



## ■ 入院していた病院の運営主体

病院の運営主体の内訳をみると、「公的医療機関」39.5% (n=1,296/3,282)、「国」33.0% (n=1,082/3,282)の順に割合が高かった。

図表7 入院していた病院の運営主体 (n=3,282)



## ■ 入院していた病院名

回答者が付き添いをしていた病院は、全国に幅広く分布していた。このうち、回答者が10人以上であった病院名を回答者数が多かった順に以下に示す。

回答者数が多い順		
① 国立成育医療研究センター病院	⑳ 群馬県立小児医療センター	㉓ 弘前大学医学部附属病院
② 福岡市立こども病院	㉑ 日本赤十字社医療センター	埼玉医科大学総合医療センター
③ 名古屋大学医学部附属病院	三重大学医学部附属病院	高槻病院
④ 九州大学病院	榊原記念病院	熊本大学医学部附属病院
⑤ 京都大学医学部附属病院	㉒ 藤田医科大学病院	㉔ 日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第二病院
⑥ あいち小児保健 医療総合センター	㉓ 長崎大学病院	浜松医科大学医学部附属病院
⑦ 岡山大学病院	総合病院聖隷浜松病院	NHO岡山医療センター
⑧ 大阪母子医療センター	NHO静岡 てんかん・神経医療センター	岐阜大学医学部附属病院
⑨ 長野県立こども病院	広島大学病院	秋田大学医学部附属病院
⑩ 大阪大学医学部附属病院	㉕ 富山大学附属病院	JA安城更生病院
⑪ 兵庫県立こども病院	久留米大学病院	ポバース記念病院
⑫ 北海道大学病院	岐阜県総合医療センター 小児医療センター	国立精神・神経医療研究センター
⑬ 大阪市立総合医療センター 東京女子医科大学病院	広島市立広島市民病院	旭川医科大学病院
⑭ 東京都立小児総合医療センター	㉖ 神戸大学医学部附属病院	岩手医科大学附属病院
⑮ 新潟大学医歯学総合病院	慶應義塾大学病院	㉗ 千葉県こども病院
⑯ 順天堂大学医学部附属 順天堂医院	杏林大学医学部附属病院	石川県立中央病院
京都府立医科大学附属病院	佐賀大学医学部附属病院	倉敷中央病院
⑰ 東京大学医学部附属病院	JCHO九州病院	日本大学医学部附属板橋病院
⑱ 松戸市立総合医療センター	JCHO中京病院	徳島大学病院
⑲ 埼玉県立小児医療センター	㉘ 東京慈恵会医科大学附属病院	自治医科大学とちぎ 子ども医療センター
⑳ 福島県立医科大学附属病院	鹿児島大学病院	愛知医科大学病院
千葉大学医学部附属病院	山形大学医学部附属病院	医学研究所北野病院
神奈川県立こども医療センター	国立循環器病研究センター	加古川中央市民病院
東北大学病院	㉙ 兵庫県立尼崎総合医療センター	㉚ 日本赤十字社長岡赤十字病院
沖縄県立南部医療センター・ こども医療センター	名古屋市立大学病院	福岡大学病院
宮城県立こども病院	奈良県立医科大学附属病院	船橋市立医療センター
㉑ 北海道立子ども 総合医療・療育センター	関西医科大学附属病院	日本赤十字社成田赤十字病院
㉒ 静岡県立こども病院	金沢医科大学病院	聖マリアンナ医科大学病院
㉓ 筑波大学附属病院	金沢大学附属病院	NHO小倉医療センター
札幌医科大学附属病院	㉔ 日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第一病院	宮崎大学医学部附属病院
㉔ 東京医科歯科大学 医学部附属病院	日本医科大学附属病院	香川大学医学部附属病院
	愛媛大学医学部附属病院	国立国際医療研究センター病院
	㉕ 天使病院	埼玉医科大学病院
		NHO四国 こどもととなの医療センター



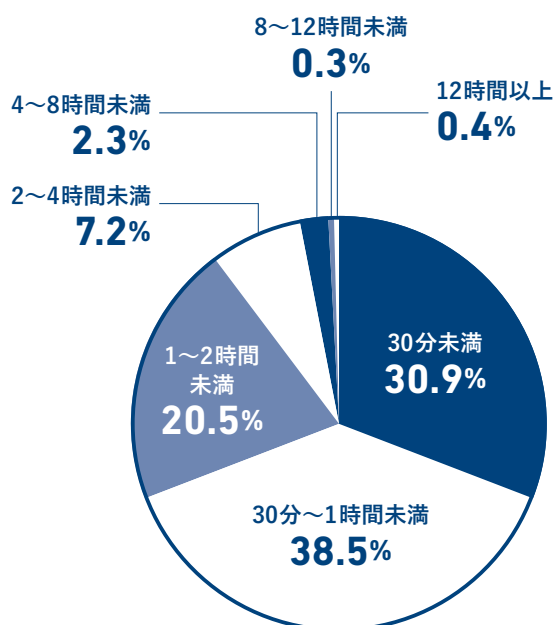
## 7 病院までのアクセス

### ■ 自宅から病院までの所要時間

自宅から病院に行くのにかかる時間をみると、「30分未満」30.9%（n=1,124/3,643）、「30分～1時間未満」38.5%（n=1,404/3,643）をあわせて7割弱が1時間以内であった。それ以上の時間を要する人たちもあり、「1～2時間未満」20.5%（n=746/3,643）、「2～4時間」7.2%（n=262/3,643）だったほか、少数ながら12時間以上という回答も0.4%（n=14/3,643）みられた。

年齢3区分別にみると、所要時間の内訳に大きな違いはみられなかった。

図表8 自宅から病院までの所要時間（n=3,643）

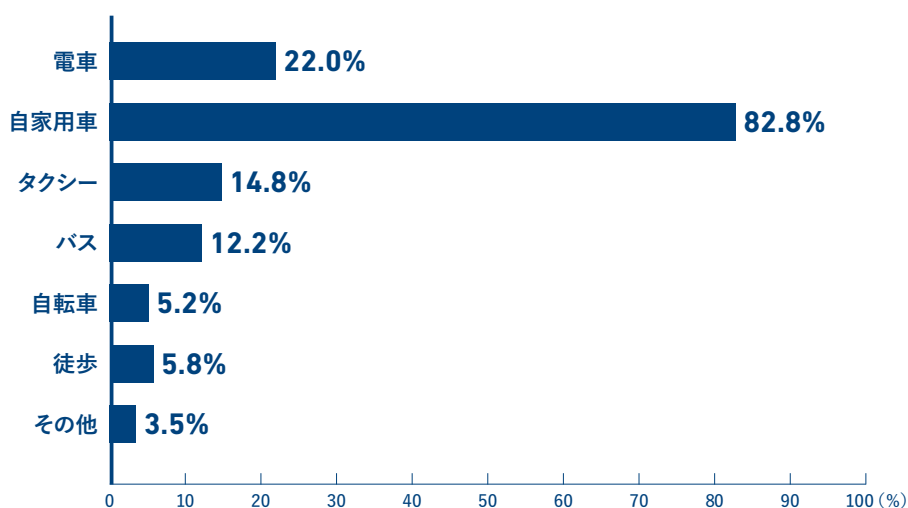


### ■ 病院までの交通手段

入院先の病院に行くまでの主な交通手段（最大3つまで選択）についてみると、「自家用車」82.8%（n=3,017/3,643）が最も多く、「電車」22.0%（n=802/3,643）、「タクシー」14.8%（n=539/3,643）、「バス」12.2%（n=445/3,643）がこれに次いだ。

「その他」記入された具体的内容をみると、「飛行機」36件、「新幹線」36件、「船」10件といった記載があり、長距離の移動を要する入院となっていることが推察された。

図表9 自宅から病院までの交通手段（n=3,643）複数回答



## 8 付き添い時の状況

### ■ 入院の状況

入院時の状況をみると、「緊急入院」60.6% (n=2,209/3,643)、「予定入院（治療だけでなく検査入院、経過観察入院なども含む）」39.4% (n=1,434/3,643)であり、突然付き添い生活が始まる状況のほうが多いことが把握された。

年齢3区分別にみると、入院時の状況に大きな違いはみられなかった。

病気の分類別にみると、緊急入院の割合が高いのは「呼吸器の病気」83.8% (n=483/576)、「血液の病気」83.5% (n=167/200)、「糖尿病」75.0% (n=9/12)、「腎臓の病気」74.7% (n=124/166)、「免疫の病気」74.1% (n=80/108)などであった。予定入院の割合が高いのは、「心臓の病気」65.3% (n=438/671)、「神経・筋の病気」56.3% (n=188/334)などであった。

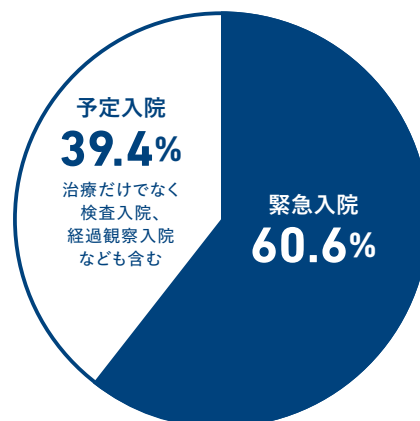
### ■ 入院の目的

入院目的が「治療」「手術」「検査」のいずれにあたるかを複数回答で把握すると「治療」77.4% (n=2,821/3,643)、「手術」41.6% (n=1,514/3,643)、「検査」40.9% (n=1,489/3,643)となっていた。

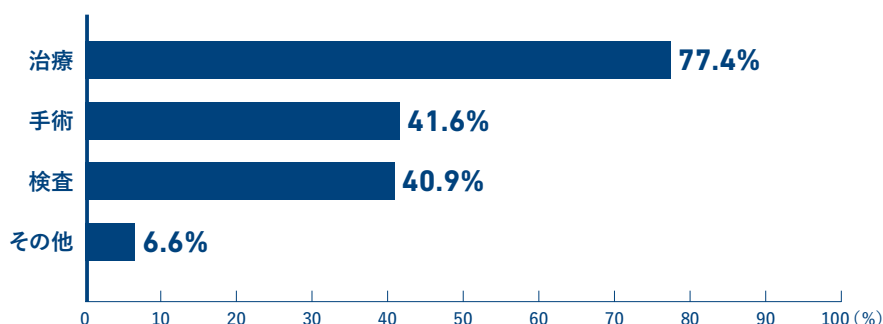
年齢3区分別にみると、入院目的に大きな違いはみられなかった。

病気の分類別に入院目的をみると、いずれの病気でも「治療」の割合が最も高い。「手術」が半数を超えたのは「心臓の病気」74.4% (n=492/661)、「皮膚の病気」61.0% (n=47/77)、「消化器の病気」59.7%であった。「検査」が半数を超えたのは「膠原病」66.7% (n=10/15)、「内分泌の病気」58.3% (n=28/48)、「血液の病気」52.0% (n=103/198)、「小児がん」50.5%であった。

図表10 入院時の状況 (n=3,643)



図表11 入院の目的 (n=3,643)



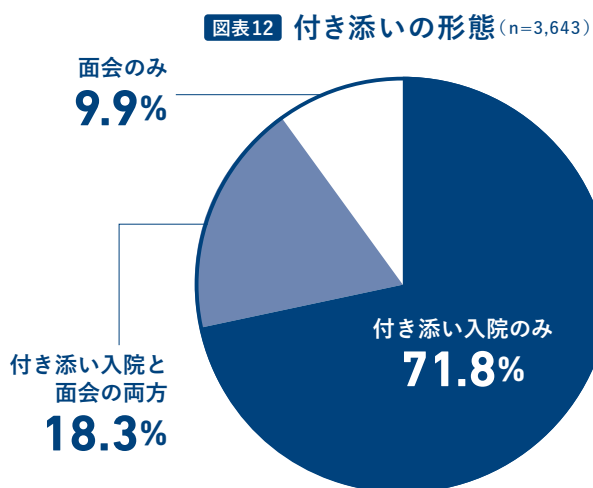
## ■ 付き添いの形態

付き添いの形態を、病院に泊まり込んで行う「付き添い入院」と、病院に通って行う「面会」に分けると、「付き添い入院のみ」71.8% (n=2,614/3,643)、「面会のみ」9.9% (n=361/3,643)、「付き添い入院と面会の両方」18.3% (n=668/3,643)であり、9割以上の回答者が、泊まり込みの付き添いを行っていた。

年齢3区分別にみると、「付き添い入院のみ」の割合は、幼児(1歳~6歳未満)で最も高く、78.0% (n=1,346/1,725)を占めた。「面会のみ」の割合は、乳児(1歳未満)14.2% (n=177/1,244)、幼児6.1% (n=106/1,725)、児童(6歳以上)11.6% (n=78/674)であった。

入院期間別にみると、短期(2週間未満)では、「付き添い入院のみ」82.2% (n=1,156/1,406)、「付き添い入院と面会の両方」10.3% (n=141/1,406)、「面会のみ」7.8% (n=109/1,406)であるのに対し、長期(2週間以上)では、「付き添い入院のみ」65.2% (n=1,458/2,237)、「付き添い入院と面会の両方」23.6% (n=527/2,237)、「面会のみ」11.3% (n=252/2,237)となっていた。

病院の種別にみると、「付き添い入院のみ」の割合が高かったのは、大学病院76.2% (n=1,181/1,550)、それ以外の病院79.5% (n=1,142/1,437)であった。一方、子ども病院では「付き添い入院と面会の両方」35.4% (n=222/628)と「面会のみ」21.3% (n=134/628)の割合が比較的高い。



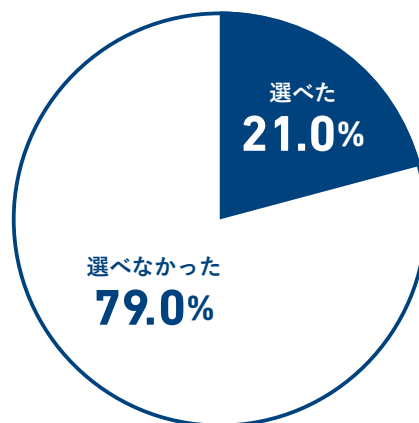
### ■ 付き添い形態の選択可否

付き添いの形を選べたか否かについては、「選べた」21.0% (n=764/3,643)、「選べなかった」79.0% (n=2,879/3,643)であり、8割近くが選択の余地なく付き添いをしていた。

年齢3区分別に「選べなかった」と回答した割合をみると、乳児(1歳未満)で84.0% (n=1,045/1,244)、幼児(1歳~6歳未満)で83.0% (n=1,385/1,725)、児童(6歳以上)で66.6% (n=449/674)であり、年齢が低いほど高い割合である。

入院期間別では、短期(2週間未満)で82.9% (n=1,166/1,406)、長期(2週間以上)で76.6% (n=1,713/2,237)が「選べなかった」と答えている。病院の種別では、「選べなかった」割合が大学病院では81.4% (n=1,262/1,550)、それ以外の病院では85.5% (n=1,228/1,437)とする一方、子ども病院では58.6% (n=368/628)と低下しており、大学病院やそれ以外の病院と比較すると、子ども病院のほうが付き添いの形態を選択できる割合がやや高くなっている。

図表13 付き添い形態の選択可否 (n=3,643)

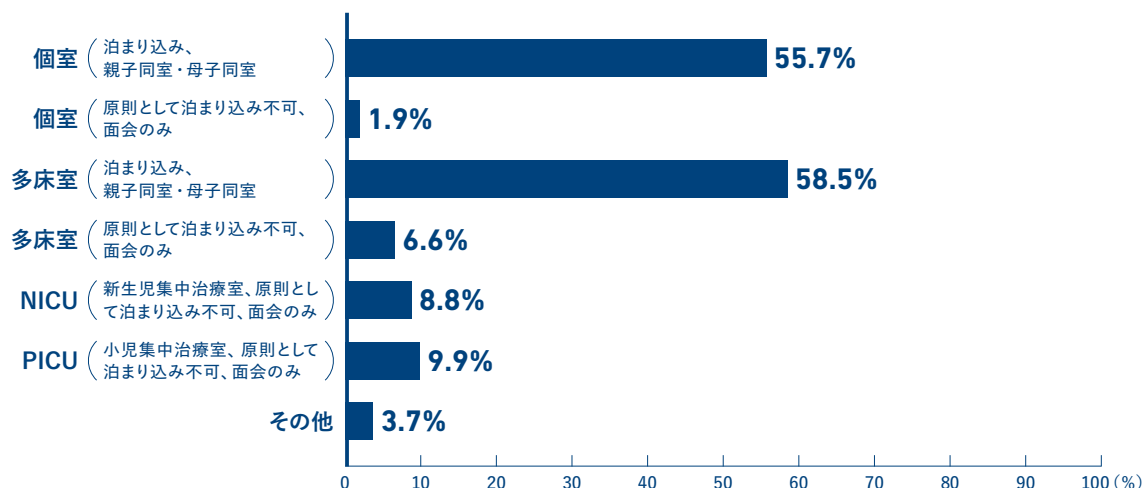


## ■ 病室のタイプ

付き添い時（泊まり込み、面会の双方を含む）の病室のタイプを複数回答で把握すると、「多床室（泊まり込み、親子同室・母子同室）」が58.5%（ $n = 2,132 / 3,643$ ）、「個室（泊まり込み、親子同室・母子同室）」55.7%（ $n = 2,030 / 3,643$ ）と、それぞれ高い割合であった。

年齢3区分別にみると、乳児（1歳未満）では原則として泊まり込み不可・面会のみであるNICUが20.6%（ $n = 256 / 1,244$ ）、PICUが12.9%（ $n = 161 / 1,244$ ）であった。

図表14 病室のタイプ<sup>○</sup>（ $n = 3,643$ ）複数回答



## ■ 付き添い中に泊まった場所

付き添い時（泊まり込み、面会の双方を含む）に主に泊まっていた場所をみると、「病室」90.2%（ $n = 3,287 / 3,643$ ）が突出して多く、「自宅」は13.0%（ $n = 472 / 3,643$ ）である。また、「家族の滞在施設（マクドナルドハウスなど）」5.0%（ $n = 182 / 3,643$ ）、「ホテル」1.9%（ $n = 70 / 3,643$ ）などに宿泊する人も一定数みられる。「その他」の具体的記載内容をみると「ウィークリーマンション・マンスリーマンション・賃貸アパート等」と回答した人が15件あったほか、院内の家族控室等（6件）、院内ロビーの椅子（1件）という記載もあり、「車中」（16件）とあわせて厳しい環境で宿泊している様子がうかがえる。

年齢3区分別にみると、宿泊場所の内訳に大きな違いはみられなかった。

図表15

付き添い中に  
泊まった場所  
（ $n = 3,643$ ）複数回答

